



月に寄せて スクールカウンセラー 松尾公孝

4月24日は満月でした。春の月はおぼろ月というイメージでしたが、家路を急ぐ車の中から見た月は澄んだ光を放っていました。

今年の大河ドラマである「光る君へ」の主人公、紫式部になる”まひろ”は何かにつけよく月を見ます。恋しい人を思うとき、小さい頃に亡くなった母親を思うとき、何もかもうまくいかずこの先どうやって生きていこうかと思悩むとき。月はいつも青白い光を柔らかかに放っているだけです。

その”まひろ”が見ていた月を、1200年後に私たちも見上げています。あなたはどんな時に月を見上げますか。月など見上げる暇もないほど忙しいですか。月を見ても何も言ってくれないと思っている人も多いでしょうが、月は私たちの心の鏡なのです。確かに、楽しいときは忙しくて月を見ることも思いつかないでしょうが、物思いにふけるときはつい見入ってしまいますね。そして、ああでもないこうでもないで心でつぶやくときに、月はやさしく聴いてくれます。何も言わないのだけど、あなたはあなたでいいんじゃないとささやいてくれるように思えます。一人じゃないよと、きれいな光を届けてくれます。月との対話で心が整理されて安心して深い眠りにつけます。月は私だけの月であり、みんなの月でもあります。



